

異世界で失敗しない100の方法

登場人物 紹介

ハイル

旅の剣士。金髪碧眼の
美貌の持ち主。
無口だが、優しい。

ジャック

ハイルと共に旅をしている
弓の名手。やんちゃな性格。

ゴードン

ミレーユ村の村長。
物知りな好々爺。

ダグラス

マチルダの夫。
染物を生業にして
生活している。

メアリー

ミレーユ村に住む少女。
他人に壁を作る不器用な
性格だが、ソーマには
懐いている。

マチルダ

ミレーユ村の住人。
世話焼きで働き者。

ソーマ(相馬智恵)

異世界にトリップした
ファンタジー小説好きな女子大生。
身の安全のため、男の姿をして
生活している。



1 はじめに心構えをしておきましょう

異世界トリップ系の小説や漫画が大好きで、異世界に行ってみたいなあと、ぼんやり考えていた。でも、一方で実際行ったら大変なんだろうなとも。

だって、言葉が通じないことだってあるんだよ？

運良く言葉が通じたとしても、そこにいる人たちとは文化も習慣もまるで違うんだよ？

隣の外国に行くのだって躊躇ちゆうちゆうするのに、別世界の全く違う概念を持って生活する人たち——いや、もしかしたら人間じゃなくて、エルフやら魔族かもしれないけれど——と上手くやっていくのはきつとすごく大変だろう。

ドキドキワクワクするよりも、相手と意志疎通が取れない状況にイライラウツウツする方が、実は多いんじゃないかと思うのだ。夢のない話で恐縮だけど。

そんな異世界にトリップするなんていう非現実的なことを、妙に現実的に、さらに後ろ向きに考えてしまうのは、私が目下就職活動中だからだろう。上手くいかない現実から逃避したい気持ちと、逃避した先も今と同じでそんなに甘くないだろうな、という冷めた気持ち……

昨日受けた面接も、通知を待たずとも結果はわかっている。最後の礼をした時点で惨敗さんぱいしたことに

を悟った。面接官の苦笑した表情が瞼の裏に蘇る。緊張で舌がもつれた無様な自分の声が、耳の奥でリフレインする。

ええい、やめやめ！ 気持ちを切り替えて次、次！ と頭を振るけど、なかなか思考は素直に言うことをきいてくれなくて。

だから、思うんだ。いつそ異世界に行ってしまういなって。

でも、行つたその先もきつと、甘くはないんだろうなって。

そう思うんだ。

* * *

私、相馬智恵。大学四年の夏を過ぎたというのに内定はいまだゼロ。

面接からの帰り道——今日もまた、実りない一日だった。

大学四年の初秋に入った今、大学に行くのはゼミのある日くらいだ。

あとの時間は就職説明会に参加したり、アパートで頭を捻りながらエントリーシートや履歴書を書いたり。なんとかこぎつけた面接を受けに行つては打ちのめされたりと、そんな毎日を送つていた。

今日受けた会社はブラック企業だったのか、それともストレス耐性を見るためだったのか、過度の圧迫面接だった。

なにを答えても、つまらなそうに「だから？」と返され……それくらいでめげてたまるかと、懸命に考え練習してきた志望動機を話せば、「あー、いいいい、もういいから」とうるさそうに手を振られ……。果ては半笑いで「きみは弊社に向かないようだねえ」と最後通告された。

どう答えたら正解だったのかさえわからないまま、気付けば自宅のアパートへ続く道をトボトボと歩いていった。身体よりも心の方がぐたくたくで、パンプスと、灰色のパンツスーツが妙に重く感じられた。

見上げれば空は橙に薄紫が混じつており、家の灯りがぼつりぼつりとつき始めていた。どこかの家の夕餉の香りが風に乗ってくる。

一つ先の角を曲がれば、住み慣れたワンルームまであと数メートル。ようやくほっとして、ため息が漏れた。

「……今日のことは忘れよう。おいしいコーヒーでも飲もうっと」

お気に入りの豆を丁寧にお湯でドリップし、ちよつとだけ贅沢して気持ちを切り替えよう。

そう決めて、電信柱を横目に一步を踏み出したときだった。

踏みしめるはずだったコンクリートの地面に足が沈み込んだ。

「え？」

階段を踏み間違えて、一瞬バランスを崩したときのような感覚だった。

あれ？ 私、なにか踏み間違えた？

けれど、あ、違う、そうじゃない、と動物的な本能で悟った。

なぜなら今も右足はどこにも着地せず、沈み込んでいつているからだ。そしてもはや、足というより身体全体が、どことも知れない遥か彼方に向かって落下している気がする。そんな未知の感覚に、落ちながらも身体が委縮する。手も、足も動かない。

「な、に？」

なんなの？ これ。私、死ぬの？

視界に入る風景は、すべて真つ黒。墨で塗りつぶしたみたいな暗闇を、ただひたすら下に落ちて行った。

最後に脳裏に浮かんだのは、同じような顔をして同じようなスーツを着た面接官たちが私に向かって手を振る姿だった。

きみは弊社に向いていないようだね。

きみはこの世界にも向いていないようだね。

そんな風に三日月みたいな口で笑って、片手を振っていた。

2 次に現状を把握しましょう

どこか遠くで、爽やかな小鳥のさえずりが聞こえる。

チイパ、チイパ、ルルルル……

鳥類特有の不思議な高い鳴き声。

なんの鳥だろ……。というか、なんだか眩しい。

いつの間にか眠っていたらしい。瞼を閉じていても、明るい光に照らされているのを感じる。

うつすらと目を開け、すぐ視界に入ったのは大きな樹。葉と葉の合間から木漏れ日が降り注いでいた。

明るさから考えて、今は朝のようだ。

「え、朝？」

驚いてがばつと身を起こす。急いで辺りを見渡せば、なぜか私はただっ広い草原にいた。

野生の草花が生い茂り、道らしい道はない。

緑の絨毯にまばらに樹が生えており、どうやら私はその中でも一番大きな樹の下で寝ていたらしい。

「どういふことなの……？」

知らず茫然として呟いていた。

だって私は、ついさっきまで夕暮れの見慣れた道を歩いていたはずだ。コンクリートで舗装された道。週に何度も通うコンビニがあった、もう少し歩けば住み慣れたアパートがあった……

なのに、いきなり真つ暗な穴に落ちたかと思ったら、見知らぬ場所にいました。

って、これじゃあ、まるで。

「……異世界？」

いやいやまさか、と慌てて首を振る。そりゃ異世界トリップ小説やら異世界召喚系ファンタジー小説やらは読み漁ってきたけれど。そして私も異世界に行ってみたいな、なんて思ったのも一度や二度じゃないけれど。

それがあっさり現実になるなんて、そんな馬鹿な。夢の見すぎというか、妄想逞しすぎだ。そう思うのに……

もう一度ゆっくり辺りを見渡す。

よく見れば草原の中には、小さな青い花が咲いていた。近づいてみるとそれは、露草でもオオイヌフグリでもなく、ギザギザの花びらを持つ花だった。

「こんな花、初めて見る……わっ、毛虫！」

もっとよく見ようと手を伸ばすと、小指の先ほどの小さな毛虫が一匹くっついていて、驚いて手を引つ込める。その虫もまた、見たことのない姿をしていた。目に鮮やかな赤紫色の虫。

そしてなにより、辺りを流れる風が——空気が違う。

見知らぬ草木や花から漂う濃い空気は、今まで感じたことのないものだった。深呼吸すると、ここは私の知っている場所ではないのだと、肺に、胸に伝えてくる。

例えば、初めて日本のある片田舎に行ったとしても、ああここは日本だなあと感じることもある。そう感じる理由は、見知ったあれこれがそこにあるからだ。

慣れ親しんだ草花、記憶のどこか懐かしい部分を刺激する民家の佇まい。古き良き日本の原風景

のように見えるが、空を見れば電線がちゃんと通っていて、そこがまた日本らしさを感じさせる。そんな感慨が、この場所ではまるで湧いてこない。知っているものが、なにもない。

端から端まで空を眺めても、電線のある気配は微塵もなく、ただ草原の先に鬱蒼とした森が見えるばかり。その森も日本の森とは微妙に違う。多分、樹の種類が違うからそう感じるのだろう。まさかという思いとやっぱりという思いが心の中でせめぎ合い、結局やっぱりという思いが勝る。

やっぱり、そうなんだ。ここは多分、私知っている世界とは違う。なんでこうなったのか理由はわからないけれど、私は地球とは異なる場所に降り立った。

「ここは、きつと異世界なんだ……」

今もまだ完全に信じきれてはいないものの、もしここが本当に異世界なのだとしたら。安全な日本とは違う、危険が満ちている場所なのだとしたら。

ドキドキと速く刻み出した鼓動を落ち着かせるため、すつと息を吸う。

「考えなきゃ……」

そう、どう行動するのが最善なのか考えなくちゃいけない。

数え切れないほどの異世界トリップ小説や異世界召喚系小説を読んだ頭が、そう訴えかける。なぜならそれらの小説の主人公たちは、物語の冒頭で大概は苦勞しているからだ。

人気のない場所にトリップして運悪く賊に見つかり、人買いに売られそうになったり、魔物が横行する森に落ちて、いきなり生命の危機に陥ったり。

大概は発動したチート能力で乗り切って、すんでのところで誰かの助けが入るけれど、それは小説だからだ。

そんなお約束な幸運が私の身に舞い降りてくれるとは思えない。なぜなら……

「私、召喚されたわけでもないみたいだしなあ」

はは、と遠い目で呟く。

そう、誰かに呼ばれた気がして……だの、魔法陣や不気味な手が現れ、その中に引きずり込まれて……だの、異世界召喚系小説のお約束な出来事が、私の場合全くなかったのだ。

いきなり落とし穴に落ちて、目覚めれば異世界に着いてました、という状況。

言うなれば、運悪く次元の狭間に落ちて、気付いたら世界の境界線を越えてしまいました、という感じだろうか。

というわけで、ただ運が悪かっただけで、世界を救う勇者や巫女として呼ばれた可能性は、限りなく低いと思われる。

大体、そういう場合って異世界に着いて最初に「おお、勇者様……！」みたいな感じで召喚した人が駆け寄ってきたりするしね。巫女の場合は、イケメン王子様や王様の上にピンポイントで落ちたりとかさ。

そんなわけで、迎える人が現れる可能性も期待できない。

さっさと動かないと、そのうち暗くなつて動けなくなるだろう。なにせ、ここには街灯というものが無い。

魔物が出てくるというのはさすがにファンタジー小説の読みすぎとしても、野生動物に襲われる可能性はあるだろう。

なにせ、今も聞いたことのない鳥の鳴き声が遠くから聞こえるし、視線の先にある森は、どんな動物が住んでいてもおかしくない不気味な雰囲気醸し出していた。しかも人の気配は全く感じられない。

「人……そうだ、人のいる所を探そう」

ぼん、と手を叩く。

ひとまず、ちょっと怖いけれど森に向かうことにした。

最初にいた樹の下から出てひとしきり歩いて辺りを見渡してみたものの、草原の中には人の足跡はなく、家や小屋のような人の手で作られたものも見当たらない。

そして森に近づくにつれ、吸ったことのない緑の香りが濃くなっていく。

ここに来てようやく、やはり自分は意識のない間に見知らぬ外国に拉致されたわけでもなく、本当に異界の地に来たということを実感した。

なぜとかどうしてなんて、考えていても始まらない。なぜなら答えてくれそうな人がどこにもいないから。

とにかく森に入れば、もしかしたら小さな木こりの小屋くらいはあるんじゃないかなと思いついて、動くことにした。

——しかし。

「うーん、ないなあ」

それに、歩きにくい。

足元はパンプスなのだ。ヒールが低いのは幸いだったが、それでも鬱蒼と茂る草木をかきわけ、ふいに現れる木の根っこに転びそうになりながら歩くうち、黒い革靴は見事に泥だらけになった。パンツスーツの裾も汚れ始めている。

登山用の服装をしていたら行動しやすかったんだろうなあ、などと考えても仕方のないことを思う。

チイパ、チイパ、ルルルルル……

「あ、またあの鳴き声」

さつきよりも近い。見上げれば、樹の枝がいくつも伸びているが、鳥の姿は見えない。もしかしたらあまり目立つ色の鳥ではないのかもしれない。

むんとする濃い緑の香りが嗅覚を刺激する。歩くほどに強くそれを感じるのは、徐々に呼吸が荒くなってきたからだろう。

「早く、道なりなんなり、見つけないと……体力、もたない、かもなあ」

途切れ途切りに息を吐く。私は健康ではあるけれど根っからの文系人間で、体力に自信がある方ではなかった。ちよっとだけ休もうと辺りをぐるりと見回したとき、探し求めていたものが目に入った。

太い幹の間にある、根元から切られた切り株。そこから伸びる、見落としそうなほど細い道。つまり、ここまで人がやってきたということだ。

「あ」

探し求めていたものがふいに訪れ、私はぼかんと口を開けて固まったのだった。

* * *

そこから先は早かった。

草に隠れてしまいそうな細い道を歩き続けると、次第に道幅が広くなり、街道と言っても差し支えないような所に出た。

細い二本の轍は、馬車の通った跡だろうか。それがいくつも重なり、今も消えていないということだ。ここを定期的に通る人がいるということだ。

前を向いても後ろを向いても人の姿は見えないけれど、ずっと歩いていけば会えるかもしれない。身体は疲れていたが、その期待が私の心を逸らせた。

そして二十分ほど歩き、ようやく小さな集落を発見したのだった。

3 身だしなみを確認しましょう

「やった、町だ……!」

集落だと思っていたそれは、近づいてみると思っていた以上に大きな町だった。

町の周囲が林に囲まれているため、最初見たときには茶色の煉瓦造りの門しか見えなかったが、近づいてみれば、その町は街道沿いにあり賑わっていた。

門には特に門番の姿は見えない。自由に出入りしても問題ないようだ。門の先には雑多に物が並んだ市場と、のんびり歩く人々の姿が見えた。

「良かった、ちゃんと人もいる」

嬉しさのあまり足早に近づこうとして、はつと足を止める。

ちよつと待って、私、このまま近づいて大丈夫なの？

またしても、私の中の異世界トリップ無駄知識が働いたのだ。

異世界トリップ系の小説では黒髪黒眼が特別視されたり異端視されたりするというのが、よくある。

例えば、黒髪黒眼は高貴な人にしか現れない色とされて崇められたり、逆に魔族のみが持つ色とされて問答無用で排斥されそうになったり……

それに。

「今の私の服装……この世界では異質じゃないかな？」

薄汚れた灰色のパンツスーツに、同じく汚れた黒いリクルートバッグ。

小説でよくあるのは、女子高生がミニスカートの制服姿でトリップして「おかしな格好をした娘だ。捕らえろ!」となる展開。若い娘がみだりに肌を見せない世界では、遊女扱いされたり他国からの侵入者扱いされたりする。

その点は大丈夫だろう。私が着ているのはスーツだし、パンツスーツだから足も見えない。

「あとは……問題は髪と目、なんだよね」

目はまだ、ごまかせる気がする。光の加減によつて茶色っぽく見えることもあるし、そもそも面積が小さいからそれほど相手の注意を引きつけないだろうし。

リクルートバッグの中をがさごそと漁る。出したのは、寒いときに羽織ろうと思っていた薄手のカーディガン。

「うーん、こんなでも巻いておく、か？」

ターバンを巻く習慣がない地域だったらおかしな風体の人に思われそうな気もするが、連行されるほど変な格好ではないはずだ。命の危険には代えられない。

それにスーツに合わせて色が濃いグレーのカーディガンを持っていたので、色の統一感も取れている……ような気がする。ポプの長さの髪にくるくると巻きつけてなんとかターバンの体裁を取った。



「あ、あと……そうだ、化粧」

そうだ、就職活動中だったので化粧もしていたんだってと、はっと気付く。
ナチュラルメイクといえど、この格好だとなんだかちぐはぐな感じがする。それに、もしもこの世界では化粧品が貴族のような身分が高い人しか持てないものだったとしたら、悪目立ちしてしまう可能性もある。

「最初から失敗したくないもんね……うん、よし！」

念には念を入れようと、鞆の中に入れていたウエットティッシュでさっと拭き取る。ようやく私
は対異世界文化への格好を整えたのだった。

町に入ると、そこには予想していた通りの異国情緒溢れる光景が広がっていた。

中世ヨーロッパの下町の市場は、きつとこんな感じなんじゃないだろうか。
目に入るのは、色、色、彩。

「うわあ……！」

耳に入って来るのは、人々の声や様々な物音がぶつかり合う、がやがやとした喧騒。その喧騒の中を、時にすれ違う人の肩にぶつかりそうになりながら歩いていると、店先に並んだ鮮やかな果実たちが目に入ってきた。

店先に並んでいるのは、マンゴーに似た形の真っ赤な丸い果物や、たわわに実った葡萄のような
フォルムをしている鮮やかな黄色の果実。その隣には紐で束ねられてぎっしりと並べられた葉野菜。

青々としていて、横を通ると葱に似た、鼻にツンとくる独特の香りがした。向こうの軒先にぶら下げられているのは、肉の腸詰や魚の燻製だろうか。軒が傾くのではと心配してしまふほど、赤茶の塊が、たくさんぶら下げられている。少し離れた所では、背をびんと伸ばし、矍鑠とした老婆が髭面の店主と威勢のいいやりとりをしている。

どこかに屋台でもあるのだろうか。肉にタレをつけて焼いたような香ばしい匂いが風に運ばれてきて、ふと私の鼻をくすぐった。

目に入るものや音、香りのすべてが新鮮で、視線が目まぐるしく動く。

「あ……そうだ。服装、服装」

町を歩く女性たちの姿を眺めれば、身体をゆったりと包む白や生成りのブラウスに、下は焦げ茶や臙脂など落ち着いた色の裾の長いスカートを着ていた。大体はその上に、エプロンに似た白い前掛けを身につけている。

髪は中世的な雰囲気からしてやはりというか、ショートカットにしている人は一人も見当たらなかった。長い髪を下ろしてなびかせている人もいれば、おさげにしたり、編み込んだ髪の上からスカーフで覆っている人もいる。

男性は、上着もズボンも主に白や茶色などで統一していて、色彩的には女性よりも地味だった。

現代日本の男性の衣服と比べても、裾が少しゆったりした作りである以外は、そこまでの差異は見受けられない。

実際、私が歩いていてもちらりと見られることはあっても、極端に不審な目を向けられることはなかった。良かった、どうやら私の格好はそこまでおかしくはないらしい。男性として見ればだ。ほっと一安心だが、まだ懸念は残っている。

「問題はやっぱり……言葉、なんだよね」

これが怖い。なぜなら。

「思いつきりアングロサクソン系なんでもんなあ……」

いや、コーカソイドと言った方が正しいのだったか。いずれにせよ、町を歩く人々の顔を再び見遣ると溜息が漏れる。

白い肌、茶や赤茶、金の髪。そして緑や青、鳶色などの淡い色の瞳。見るからに色素が薄く目鼻立ちのはっきりした顔立ちは、日本で言うところのいわゆる白人的容貌だった。

外国語の苦手な私にとっては、地球であればまず意志疎通が取れないだろう見た目の人々なのだ。今も声や煩雑な物音が重なった、がやがやとした音は耳に入るが、意味のある言葉を聞き取るこ

とができない。

それは単に賑やかすぎて声が埋もれてしまっているだけなのか、それとも私が彼らの言葉を理解できないからなのか……

「こうしても仕方ない、話しかけてみよう」

頷くと、意を決して辺りに視線を巡らせた。

話しかけやすそうな人は……と目で探す。屋台の店主さんなんか、比較的話しかけやすそうだ。商売柄気さくな印象があるし、もし話しかけて言葉が通じなかったとしても、色々な旅人を相手にしているだろうから、そこまで気にしないでくれそうな気もする。

言葉が通じない可能性……。なるべく、考えたくはないけど。捉えどころのない恐怖が湧いてくるが、頭を振って無理やり思考を切り替える。

お菓子売っているらしい、赤い天幕が張られた店に狙いを定めて近づく。店先には腰の曲がったおじいさん店主と、大きな荷籠を背負った豊満な身体つきの中年女性客が一人いた。

「あの……」

声を掛けようとした矢先、目の前にいる女性客の背負った籠から小袋が一つ落ちた。元々たくさんのものが詰め込まれた籠を背負っていて、腰の曲がったおじいさんに合わせて身をかがめた際、一番上に載せてあったものが零れ落ちたのだ。

だが、支払いを終えた女性は気がつかずに、そのまま歩き去って行く。

「え、あ、あの！」

私は反射的に動いた。目の前で誰かがなにかを落としたら、追いかけて渡す。考える前に身に染みついた行動を取っていた。女性がぐるりと不思議そうな顔をして振り返る。

そこで、言葉が通じないかもしれないんだっと思ったと思いつく。固まった私の前で、赤毛の中年女性がゆっくりと口を開いた。

「なんだい？」

首を傾げた女性の第一声を聞いて、一瞬涙が出そうになった。

言葉が通じる！ ただそれだけのことがかんなに嬉しいものだとは思わなかった。前に読んだ異世界トリップ小説のことを思い出しながら、できるだけ冷静に物事を考えようとしていたけれど、実際は心配だったのだ。

この世界でやっていけるのだった。戻れるのかもわからないこの世界で、普通の生活が送れるだろうかって、不安だった。

でも、だいじょうぶだ。きつと。文化も習慣もまだなにもわからないけれど、言葉が通じるなら、きつとなんとかやっていける。

「ちょっとあんた、どうしたんだい？」

気遣わしげに重ねて声を掛けられて、泣きそうになっていたことに気付く。

慌てて目を袖でごしごしと拭い、落とし物を差し出す。作りものじゃなく、本当の笑みを浮かべることができた。

「あ、いえ、すみません。落とし物、貴方ではないかと思って」

「あらやだ！ それで追い掛けてきてくれたのかい。すまないねえ」

女性が心底申し訳なさに謝る。そして茶色の小袋を受け取って目をみはった。

「よりもよって旦那の薬を落としましたのかい、あたしは。ありがとうよ、お兄さん。これがなかったら、村に戻ってもすぐに逆戻りすることになっちまうところだったよ」

「お兄さん……」

やっぱりこの格好だと男に思われるのか……

この世界の女性なら着ないのだろうズボン姿に、百六十八センチメートルと女性にしては比較的高めの身長。そして凹凸おうちょうがあまりない身体つきも理由の一つかもしれない。

性別については、特に否定しなかった。日本よりも治安が悪い可能性が高いこの世界で、女性の一人旅と思われるより男と勘違いされたままの方が都合が良いような気がしたからだ。

心持ち、いつもよりやや低めの落ち着いた声で話そうと意識する。

「いいえ、お役に立てたのなら良かったです。では」

微笑んで目礼して去ろうとしたら、女性に呼び止められた。

「ちよつと待っておくれ、あんた」

「え？」

不思議に思って振り向くと、機嫌良さげに細められた榛色はしまみの瞳と目が合った。

「ささやかで悪いんだけど、お礼をさせてくれないかい？」

* * *

女性は、マチルダと名乗った。

怪我をした旦那さんの傷薬を買うため、隣の村からやって来たらしい。私がこんなことを知っているのも、礼をすると言って連れ出された道中で、彼女が様々なことを話してくれたからだ。

おしゃべり好きな気のいい性質たちなのだろう。今も、楽しみに話を続けている。

「それでねえ。もうすぐ村じゃ祭りもあるし、なら飾りも一緒に買って行こうって。そういや隣のセア婆さんが魚の干したのを欲しがってた。ついでにそれも、あれも……って買い足し買い足ししてるうちに、こんな大荷物になっちまってねえ」

「それで、そんなにたくさん荷物なんですか」

この女性は、村で好かれているのだろうなと思った。世話好きで、仮に過剰に世話を焼いたとしても、それを鬱陶うっとうしいと感じさせないような愛嬌あいせうと温かみがある。年齢は四十をいくつか越えたぐらいだろうか、私の母親よりも少し若いように見える。

豊かな身体つき同様、顔もふつくらとしていて、それに埋もれることなく目鼻立ちがはっきりしている。若い頃はさぞかし男性たちの熱い視線を集めたことだろう。

「ソーマ先生は逆にびっくりするぐらい荷物が少ないねえ。まあ、長旅じゃあその方がいいだろうね。身軽で」

ソーマ先生とは、私のことだ。

なにを職業にしているのかと聞かれて、苦し紛れまぎに「学問を生業なりわいにしている」と言ったら学者と勘違いされ、ソーマ先生と呼ばれることになってしまった。

まだ就職が決まっていないから職業には就いていないし、実際大学で学問を修めているから、まあ間違いいはないのだけれど、どうにもむず痒がゆい。

「あの……その先生というの、やめませんか」

「なに言ってるんだい、学者の先生を気安く呼べやしないよ。いいじゃないか、今は気になってもそのうち慣れるさ」

笑いながらばんばんと背中を叩かれ、ごほつと噎せる。色々と豪快だ。

「さあ着いた、ここだよ」

噎せつつも目を遣れば、マチルダさんが指していたのは天井に黄色い天幕が張られた小さなお店だった。

紫色の小さな林檎のようなもの、赤い小粒の果実がたわわに実ったもの。軒先には見たことのない果物が並べられ、頭の禿げあがった親父さんが木製の器具を使い、慣れた手つきでそれらを搾っている。

どうやら、果実を搾ったジュースを売るお店らしい。

言われた通り長椅子に座って待っていると、マチルダさんはこれが美味しいんだよ、と言って二つ買ってきたものを一つ私に手渡してくれた。

木をくりぬいた器に入ったそれは橙色をしていた。

マチルダさんにならって口に運ぶと、爽やかな甘みが口に広がる。柑橘系だと思っただが、桃に近いまるやかな味でも美味しい。なにより結構な距離を歩いたので喉が渴いていたので喉が渴いていたらしい。気がつけば一気に飲んでしまっていた。

その様子をマチルダさんに微笑ましげに眺められていることに気づき、私は恥ずかしくなって頭を掻きながらお礼を言う。

「ご馳走様でした。すごく美味しかったです。これはなんとという果物なのですか？」

「カレンの実さ。皮は固くて茶色いんだけど、中身は綺麗な橙でね。この地方の特産なんだよ」

再び屋台に目を向ければ、端にそれと思しき果物が並んでいた。

あれか。新たに知った単語を、脳内にメモしておく。

お礼を済ませて満足したのか、マチルダさんが立ち上がる。

「さて、あたしはいつたん馬借の店に戻らせてもらうよ。そろそろ村に帰る支度をしなきゃならぬ頃合でね。ソーマ先生はどうするんだい？」

「私はもう少しこちらで休んで行こうと思います。その……この町を訪れたのは初めてですし、珍しいものもたくさんあるので、しばらく見物しようかと」

「そうだね。せっかく遠くから来たんだ、ゆっくり見て回るといいよ」

本当は特にすることもないからなのだが、マチルダさんは素直に納得してくれる。

その後、手を振って別れた。

マチルダさんの姿が完全に視界から消えると、私は座っていた長椅子の背もたれにずるりと背中を預ける。一人になったら、急にどつと疲れが襲って来たのだ。

「なんか……色々あったな。今日一日」

面接が上手くいかなくてへこんで、その帰り道に穴に落ちて、目が覚めたら異世界で。そして……。なんとか人のいる町を見つけて、気のいいマチルダさんと出会えて。

自分は幸運な方なのだと思う。異邦人として排斥されることもなかったし、危険な目に遭うこと

もなかった。チート能力があるのかわからないけれど、言葉も通じた。

このままなんとか町や村に溶け込んで、生活していけるかもしれない。いや、生活していかなくちゃいけないんだ。

だって私には、家もなにもない。

今は住む場所も、生計を立てる術すらないのだから。

考えなくちゃいけないことはたくさんある。けれど、今このときだけはなにも考えたくなくて、私は睡魔に誘われるままゆっくりと瞼を閉じた。

4 必要があれば性別を偽りましょう

「お客さん……お客さん！」

小さく肩を揺さぶられて、閉じていた目を開ける。

見上げれば、先ほどジュースを売ってくれた店主が困ったように私を覗きこんでいた。その向こうには、茜色に染まりつつある夕空が見える。思っていた以上に時間が経っていたようだ。

慌てて身を起こす。

「あ……すみません。眠ってしまっていたようで」

「いいんだよ。旅の最中なら、疲れてよくあることさ」

ほっとしたように店主が笑う。そして禿げあがった頭をつると撫でながら、申し訳なさげに眉を下げた。

「けど、そろそろうちも店じまいの時間だね。あんまり遅くなると、かみさんに怒られちゃうものだから……」

「そうですね。すみません、すぐお暇します」

私起きるまでしばらく待っていてくれたのだろう。申し訳ないことをしてしまった。ぺこりと頭を下げ、脇に置いておいたバッグを持つと早々に店を立ち去る。

市場に出ると、ほとんどの店が片づけているところだった。

今くらいの時間がこの市場一帯の閉店時刻なのだろう。これ以上暗くなる前に、泊まる場所を探さなければならぬ。

「宿屋か……」

こちらの世界で使える通貨なんて持っていないから、野宿することも覚悟しなければいけないだろう。というか、その可能性の方が高い。

眠って無為に時間を使ってしまったのは痛手だったが、やるだけやってみよう。そう独り言ちて、宿屋がありそうな大きな道に足を向けた。

最初に見つけた大きな宿屋では、門前払いされた。

皿洗いでもなんでもするから物置小屋の隅にでも泊めてくれないかと頼んでみたが、胡乱な目を向けられて扉を閉められたのだ。

次に見つけた宿屋は、先ほどより小さな家庭的な雰囲気のところ。

営んでいる老夫婦に、どの部屋もいっぱいだからとすまなそうに断られた。

三軒目はまだ見つからない。

もしかしたら、この町にこれ以上宿屋はないのかもしれない。

「参ったなあ……」

私は、夕闇に包まれた薄暗い町をとぼとぼと歩いていた。野宿はほぼ確定だ。

半ば予想していたことだが、実際そうなるよりはる気落ちする。小さく息を吐いた。

駄目なものは、もうどうにもならないだろう。それに一軒目の宿屋の対応を見るに、もしかしたら思っていたよりも自分の格好はおかしいのかもしれない。

だとすれば、その辺の民家に泊めてくれと声を掛けるのは無謀な行為に思えた。あと、私ができることといえば、より安全に野宿ができる場所を見つけることだけだ。

そんなことを考えながら歩いていると、少し先に大きな灯りが見えた。もしかしたらまだ宿屋が

残っていたのかと思いき、最後の期待を胸に近づく。すると、どうやらそこは酒場らしかった。酒杯のぶつかり合う音や笑い声、調子の外れたパイプオルガンのような音色が聞こえる。

ふいに扉から赤ら顔の二人組が出てきた。彼らは不穏なやり取りを始め、互いに襟首を挿んで睨み合う。

「てめえ、ふざけやがって……!!」

「やるか、この野郎！」

片方が左頬を殴られ、店の前に並べられた椅子の間に豪快に倒れ込んだ。通りかかった女性が高い悲鳴を上げる。

どう見ても酔っ払い同士の喧嘩だ。ここに長居するのは得策ではないだろう。

「とりあえず……あっちに行こう」

後ずさりして酒場の前を離れ、一つ奥の通りに足早に向かった。

そこは、先ほど歩いてきた大通りよりいくぶん狭く、お店よりも民家の多い静かな通りだった。

少し坂になった道は石畳が敷かれ、作業着を着た男性の後ろ姿がぼつりと見える。きつと彼らは、家路を急ぐ父親なのだろう。また一人また一人と、民家の扉に吸い込まれていく。

道を照らすのは、月明かりと窓から漏れる民家の灯りぐらいだ。薄暗いけれど、先ほどの通りよりは安全に思える。この辺にどこか……空き地や木陰のような休める場所があるといいのだけれど。

歩きながら視線を巡らせると、ふとある建物から漏れる明かりが目に入った。白壁のその家だけは、扉が開け放してあった。中から、話し声が聞こえてくる。

「……だなんて、話が違うじゃないか。どうなってるんだい！」

「そう言われてもねえ。うちだつて参ってるんだよ」

あれ？ この声、どこかで……

なんとなく聞き覚えのある声に誘われ、そつと近づく。入り口に動物を模した小さな看板が下げられていたので、どうやらそこは民家ではないらしい。

中を覗き見ると、見知った女性の後ろ姿が見えた。

「やつぱり、マチルダさん？ どうしてここに」

すでに村に帰ったのではなかったのだろうか。不思議に思いながら尋ねる。

恰幅の良い身体が勢いよく振り返る。突然呼びかけられて、マチルダさんも驚いたのだろう、目がまん丸く見開かれていた。

「おやまあ、ソーマ先生じゃないか！」

そして味方が現れたことに勢いづいたのか、憤懣やるかたないといった様子で、肩を怒らせて続ける。

「どうしたもこうしたもないんだよ。あのあとこの店に寄ったんだけどね、借りる話をつけておいた馬を貴族の旦那に貸しまつたつて言うんだ」

カウンターを挟んでマチルダさんの向かいにいる壮年男性に視線を向ければ、弱ったように肩を竦めて両手のひらを天井に向けている。

「それでもね、もうすぐしたら帰ってくるはずだからつて言葉信じて今の今まで待ったんだよ。

なのに、戻つて来る気配なんざありません。もう夜じゃないか！」

「そりゃまあ……うちも申し訳ないとは思ってるんだよ。けどねえ、いかんせんお貴族様にああ、逆らえないんだよ。下手をすりやここで商売できなくなつちまう」

「だからつて、他の客はどうなつてもいいつて言うのかい？」

マチルダさんが咄を吊り上げて詰め寄る。壮年店主が弱りきつた声で言った。

「勘弁してくれよ、おつかさん。本当に申し訳ないとは思ってるんだ。けど、どうしようもねえものはどうしようもねえ。お貴族様の気まぐれでどこまで行つてのかわからねえから、いつ戻るとも今になつちや答えられやしねえし」

店主がゆるゆると首を振る。

「どうしても急ぐつてんなら、辻馬車なりなんなり見つけて、そつちを使つてもらおう他ねえよ」

「辻馬車なんてそんな立派なもの、大きな商業街でもないこちを走るわけないじゃないか！ ……かと言つて、いつ戻るともしれないものを待つてもいられないし。困つたね……」

マチルダさんが床に視線を落とす。そこには市場で出会ったときより倍大きくなった荷物が置かれていた。もともと馬の背にくくりつけるつもりで買ったのだろう、野菜に果物など重そうなものが大半を占めていた。

なにより、心配げにマチルダさんが見ているのは、旦那さんの薬が入っているあの茶色い小袋だ。もしかしたら、そろそろ薬が切れる頃なのかもしれない。

会話が途切れたところを見計らつて、静かに尋ねる。

「あの、馬借ばしやくをしているのは、こちらのお店以外にはないのでですか？」

「ああ、この町じゃあここ一軒けんだけなのさ。あとは稀まれに、人が何人か乗れる辻馬車つじばしが通りかかることもあるんだけど、大きい町ならともかくこちらじゃ滅多に見掛けなくてね。それに値段も高いから、ここいらの村人や町人が気軽に借りられるような代物しろものじゃあないんだよ」

そんなことは承知しやうちだろうに、と言いたげにマチルダさんが店主をねめつけた。店主はますます縮こまる。その様子を眺めながら、私は頭を巡らせていた。

村に急いで帰りたいマチルダさん、どうにかこの場を収めたい店主さん、そして休息できる場所が欲しい私。

……もしかしたら、なんとかなるかもしれない。

一つ息を吸って、私は二人の顔をゆくりと見回した。

「あの、マチルダさん。もしよろしければですが、私わたしがその荷物を半分持ちましようか？」

「え？」

マチルダさんと店主が驚いたようにこちらを見る。私はなんでもないことを話すかのごとくゆくりと、のほほんと続けた。

「見れば、確かに荷物は多いけれど二人で分け合って持てばなんとかなりそうですし。マチルダさんの村がそんなに遠くではないのなら、いつ来るかわからない馬を待つよりも歩いた方が早いのではないでしょうか」

マチルダさんが困惑したような表情で、荷物と私を見比べた。

「そりゃまあ、そうだけど……いいのかい？ かなりの荷物だよ？」

「ええ。私は急ぐ旅でもありませんし、より多くの村や町を眺められたら嬉しいですから」

「でも、またそんな面倒をかけるわけには……」

落とし物を拾ってもらったことをまだ気にしているのだろう。豪快ごうかいなようで、繊細な部分もある女性だ。郷里の母を思い出して、私は小さく笑う。

「私の郷里には、立っているものは親でも使えて諺ことわざがあるんですよ。マチルダさん、使えるものがあるならなんでも使って旦那さんに薬を届けましよう？ ……きっと薬よりなにより、マチルダさんの帰りをハラハラして待っているでしょうから」

その言葉が決め手になったのか、思案顔だったマチルダさんは何度も頷うなずく。

「そう……だね。そうだね。手間を掛けちまうけど、ソーマ先生の手を借りさせてもらうよ」

私も小さく頷うなずき、店主にちらりと視線を向けた。

「それでは、今日はもう遅いので明日の早朝に出発するとして……今夜宿泊する場所が必要ですね……」

「そうだねえ。今晚は早く眠らないと明日に響ひびいちまう。かといって、今から宿屋は見つけられそうにないし」

マチルダさんはこちらの意図を察したのか、上手いこと乗ってくれた。おまけに、キツと店主をねめつける。

「ちよいとあなた、今日は約束の反故はげの繰り返しだったんだ。せめて一晩よどの宿やどくらいは提供してく

れるんだらうね？」

「わかった、わかったよ！　すぐに部屋を用意させるからもう勘弁してくれ、おつかさん」

店主は、降参するように両手を上げた。

店主が用意してくれたのは、店の奥にある小さな物置部屋だった。

普段は食糧や道具置き場に使っている部屋のようだ。本来窓があるべき位置には観音開きの板戸が取りつけてあった。採光するときや、空気の入替えをするときのみ開けるのだらう。夜が更けた今は、内側から木枷でしっかり閉じられていた。

部屋の隅には、中身の詰まった麻袋や背の高い木箱がいくつも雑多に積まれている。床にはなにかを引きずった跡があるので、私たちのために寝るスペースを作ってくれたのだとわかる。

そして寝床は、藁を積みあげた上に薄い敷き布をかけたものだった。これもわざわざ用意してくれたのだらう。

マチルダさんの件に関しては自業自得な部分があるとはいえ、私はかえって助かった口なので、なんだかちよつと申し訳ない気分になる。

「ソーマ先生、寝る準備はできかい？　そろそろ灯りを消すよ」

ひと一人分離れた寝床にすでに横になっているマチルダさんが、眠そうに手燭を掲げて尋ねてくる。蠟燭のほの明るい灯りが、揺らめきながら彼女の顔を照らしている。

「あ、ちよつと待ってください」

町を歩いている間、わずかだけれど黒髪の人も見かけたから、髪を晒しても大丈夫だらう。ターバンを外し、急いで寝床に横になり目を瞑る。

「……はい、大丈夫です」

ふつと息を吹きかける音がしたかと思うと、すぐに辺りは真つ暗になった。閉じた瞼の裏、ほのかな光が感じられる。明かり採りの小さな穴から差し込む月明かりだ。そのかすかな光が、心地いい。

身じろぎするような音が聞こえて、マチルダさんがまだ起きていることを知る。気にかかっていたことを思い出し、今のうちに謝っておこうと口を開いた。

「あの……すみません。男の私と同じ部屋では、あまり落ち着かないかと思いますが」

本当は女なんだけど。性別を明かそうかどうか迷って、結局隠しておこうと決めた。話してしまつたら、マチルダさんに不審な人間だと思われて怖がらせてしまうかと思ったのだ。

「あはは、なに言ってるんだい、先生。宿屋に行けば、見ず知らずの人間と相部屋なんてよくあることじゃないか。気にするようなことじゃないよ」

「あ……あはは、そうでしたね。そうなんです、少し気になってしまったもので」

そうか。そういうものなのか。この世界の常識がわからない私は、どうもおかしなことを言ってしまったらしい。笑ってごまかしつつひそかに落ち込んでみると、マチルダさんが続ける。

「そりゃあね、嫁入り前の娘だつたらちよつと問題だらうけど。あたしみたいなどうの立った女にソーマ先生が妙な気になるとも思えないしさ。……けどありがとうよ、気に掛けてくれて」

暗闇の中、ふふっとマチルダさんが楽しげに笑う声が響いた。

「多分、先生のおつかさんと同い年くらいなんじゃないかい？ あたしは」

「ええ、そうです。母の方が三、四歳上だとは思いますが。……そういえばマチルダさん、お子さんはいませんか？」

「息子が一人いるよ。今は村を出ちまって、遠い町にいるけどね。元気にしてりゃあいいけど、あの馬鹿息子……」

マチルダさんが笑いながら欠伸を噛み殺す。会話に付き合ってくれているが、やはりだいたい眠いようだ。

「あ、すみません。そろそろ眠りましょう」

「そうだね。……おやすみ」

「おやすみなさい」

すぐにマチルダさんの方から寝息が聞こえてくる。それを確認すると、私は天井を見上げた。月明かりがさつきより強く感じられる。ぼんやり天井を眺めながら、物思いに耽る。

本当はさつき、マチルダさんに性別を明かそうかと、一瞬迷った。

マチルダさんにはだいたいお気を許し始めていたし、彼女ならきつと若い娘の一人旅を心配こそすれ、不審な目で見たりはしないだろうと思えた。

けれど結局、言わないことにした。言ってしまったらきつと、必要以上に寄りかかってしまうだろうと思ったのだ。母親のような彼女に。

この世界では頼る人はいない。それを良いことに、たまたま近くにいた彼女に依存してしまう気がした。……私は、弱いから。

でもそれでは駄目だ。

ひとときでもマチルダさんに甘えて守ってもらって。でも、それからは？

帰れないまま、ずっとこの世界にいる可能性だってあるのだ。一人ぼっちの可哀想な娘として手を差し伸べてもらって、それに慣れてしまったらきつと……。一人では立てなくなってしまうだろう。

自分の足で立つことに、慣れなければいけない。だから男の振りをすることは、私にとって必要だと感じたのだ。

この世界の常識や文化がわからず、さつきみたいにおかしな言動を取ってしまうことはこれから多々あるだろうけれど、それは……おいおい学んでいかなければならない。

次第に睡魔が近づいてきて、瞼が落ちてくる。

「まずは明日……がんばらないと」

むにゃむにゃと寝言のように呟いて、私は意識を手放した。

5 日の明るいうちに旅立ちましょう

翌朝は、マチルダさんの元気な声で目が覚めた。

「さあさ、ソーマ先生、朝だよ！」

「へ？」

まだ寝ぼけている私の口から、間抜けな声が零れる。

木の枷を外すような音が聞こえたかと思うと、視界いっぱい白い光が広がった。強烈なまでに目にしみる、朝の陽光。

「ま、まぶし……」

「おやまあ、まだ寝ぼけてるのかい？」

マチルダさんのおかしそうな笑い声が聞こえてくる。

ようやく目が慣れてくると、明るい日差しが差し込む物置部屋の様子が見えた。太陽とともに澄んだ青空が顔を覗かせる窓際には、開けた板戸を壁に固定しているマチルダさんの姿。見れば、もう身支度は整っているようだ。

ハッとして、慌てて寝床から飛び起きる。

「す、すみません、寝坊してしまっただようで！」

「あはは、大丈夫だよ。急に声を掛けたからびつくりさせちゃったみたいだね。なーに、まだどこの家も朝餉あさけの時間さ」

寝起きのボサボサ頭のまま急いで身支度を整える私に、マチルダさんが優しい声で続ける。

「ただ、あたしの村までは歩いて二刻近くかかるもんでね。出発するなら早い方が良かったらと思うってさ」

マチルダさんの声を聞いているうちに、半覚醒状態だった頭が次第に明瞭になってくる。

そうだ。この世界には町や村以外に明かりらしい明かりなんてないのだから、日の沈む前に到着しなければならぬ。

もしも草原や森林で夕刻を迎えたら、真っ暗闇の中で夜を過ごすことになるだろう。火をおこすことができたとしても、野生動物やならず者に襲われる可能性がある。

「いえ、起こして頂けて助かりました。私もすぐに支度を整えますね」

髪の毛を手早く直し、昨日同様ターバン代わりの薄手のカーディガンを頭に巻きつける。黒髪が特に珍しいものではないらしいとわかったので、巻く必要はないのだが、昨日からずっとこのスタイルで過ごし続けたので、巻いていると妙に落ち着くのだ。

スーツは若干皺しぼになっていたが、今は近くに面接官も採用担当者もいないし、いいだろう。

あとは顔を洗えば最高なだけ……。さすがに、そこまでこのお店にお世話になるのは図々しいだろうか。

思案しつつつ辺りを見渡していると、マチルダさんは察したのか助け船を出してくれる。

「廊下の突き当たりには水場があるから、先生もそこで顔を洗ってくるといいよ。さつきこの店主に会ったとき、自由に使って構わないって言っていたからね」

「そうでしたか……。ありがとうございます。それでは行ってきます」
顔もだいぶ汚れていたのが、正直ほっとした。

マチルダさんに礼を言い、私はさっそく廊下へ足を向けた。

* * *

馬屋の店主が昨日のお詫びにと小さなパンをくれたので、感謝と共にそれで軽くお腹を満たし、二十分後には万全の出発となった。

そして今、マチルダさんは干し肉や干し魚、祭りに使う飾りが入った荷籠を背負い、私は果物や野菜が入った荷籠を背負い、二人で街道を歩いている。

重さで言うと、多分十五キロぐらいになるだろうか。抱えた瞬間ずしつと肩にきたけれど、重すぎて歩けないというほどではない。小さい子供を一人おんぶしていると思えば、動いたり暴れたりしないぶん、まだ楽だ。

後ろでは、今朝まで過ごした町が手のひらほどの大きさになって私たちを見送っていた。

「あたしの村は、このモンペールの町を出て北西にずっと進んでいくとあるんだよ」

「あちらの方角ですね」

今までいた町は、どうやらモンペールという名前だったらしい。脳内メモに新たに書き加える。

新たに得た知識はすぐに吸収。知らないことは知ったかぶりをしない。

この世界に馴染むため、私がひそかに誓ったのがその二つだった。

マチルダさんが指差した先には、鬱蒼とした森があった。遠くに小さな影が三つ見えるだけで、辺りに人はいない。

「森……」

モンペールを出るときは、昨日入ってきた門とは異なる門を使った。

道中聞いた話では、あの町には外へと繋がる門が東と西に一つずつあるらしい。マチルダさんの村が北西にあり、そこに向かっていることを考えれば、私が最初に入ったのが東側の門で、今し方マチルダさんと出てきたのが西側の門なのだろう。

だから向こうに見える森は、私に通ってきた森ではない。

改めて、すごく緑の多い風土だなと思う。

「しばらく道沿いに歩いていくと、森に入るんだ。森に入ってからがまた長くてねえ。中ほどに沢があるから、そこでいったん休憩としようかね」

「わかりました。では、沢までは休憩なしで」

頷いて、荷籠をぐいっと背負い直す。

それから半刻ほど、時にとりとめのない会話を楽しみ、時に口を休めて遠くの風景を眺め、疲れを逃しながら歩を進めた。

そして小一時間ほど歩いたあと、私たちはようやく鬱蒼とした森の中へと入ったのだった。

森の中は木漏れ日に溢れ、思っていたよりずっと明るかった。

外からは薄暗い森のように見えたが、太陽の光が斜めに差しこむ所もあった。まるで晴れた日に雲間から現れた天使の梯子のようだ。

「なんというか、のどかで神秘的な風景ですね……」

都会で暮らしていた時分にはお目にかかれなかった光景に、ほうと溜息が出る。綺麗な風景を見ると、すぐに写真に撮りたいと思ってしまうのは、現代人の性だろうか。

「今日は幸いお天道様に恵まれたからね。雨が降ると、途端に景色がおどろおどろしいものになるよ」

「それはそれで、見てみたいものです」

おどかすように手のひらを亡霊の如くひらひらさせるマチルダさんが可愛くて、くすりと笑う。

聞こえるのは、チチチ……という鳥の鳴き声と、時折耳を掠める羽虫が羽ばたく音。あとは私たちの歩く足音だけが、森の中に響いていた。

見上げれば樹々の切れ間からぼつかりと空が見え、鳶のような鳥が一匹悠々と飛んでいた。

「……そういえば、こっちの森にはあの鳥はいないのかな」

小さな啖きだったが、マチルダさんが拾って応えてくれる。

「なんの鳥だい？」

「あ、ええと。こことは町を挟んで反対側の森にいた鳥で、チイパチイパ、ルルルルといった感じで、ちよつと変わった鳴き声の鳥なんです」

「ああ、カナツクかい。そりゃあ、ここいらにはいないよ。《精霊の森》にしかない鳥だからね」

「《精霊の森》？ 精霊がいるのですか？」

なんだかすぐくファンタジーな単語が出てきた。ファンタジー小説好きな身としてはときめかずにはいられない。

背中に半透明の羽を生やした麗しいシルフや、神秘的な老人の姿をしたノームの姿が頭に浮かんでくる。精霊じゃないけど、妖精猫なんかもいたら素敵だ。

そんな想像と共に目を輝かせ身を乗り出して尋ねると、クスツと笑われた。

「ふふつ、先生もノリがいいねえ。精霊なんてどこにもいやしない、お伽噺の中だけさ」

「や、やっぱりいいのですね……」

がっくりと肩を落とす。でも一方でまあそうだろうな、と思った。生活様式から察するに、どうやらこの世界には魔法という概念はないようだし。

多分魔法の世界ではなく、騎士という身分が存在し、騎士道精神が人々の間に広がっている世界なのだろう。

ささやかな夢は儚く消えた。まあ、夢を見すぎていたとも言える。

「あの森には凶暴な獣はいないからねえ。あたしたち近隣の村の衆にとっては大助かりさ。もっと精霊の森が増えてくれるといいんだけどね」

「森が増える……ですか」

「なんだかちよつと不思議な言い方に感じて、首を捻る。マチルダさんが私の様子に気付いて眉を上げた。

「ああ、ソーマ先生の住んでた所にはなかったかい？ 《精霊の森》っていうのは、理由はわからないけれど、あるときから獣が現れなくなった森につけられる名前なんだ」

木々を見上げながらマチルダさんが続ける。

「それまでは狼やら熊やらがいたのに、あるときを境に段々と少なくなつて、気がつけば一匹もいなくなつて。その様子が目に見えない清浄ななかに守られているみたいに感じられるもんだから、《精霊の森》って呼ばれるようになったんだよ」

「なるほど。《精霊の森》と呼ばれる森は、この土地にいくつもあるのですね」

そして時の流れと共に増えたり、もしかしたら減つたりもするのだろう。棲んでいた動物がいなくなつたり、はたまた舞い戻つて来たりして……

「あれ？ でもあの鳥は……？」

動物らしい動物は消えたような話だったが、あのカナツクという鳥だけは例外なのだろうか。まあ確かに、凶暴な獣という感じはしなかったけれど。マチルダさんが強く頷く。

「そこなのさ。不思議なことに、他の動物たちが消えた代わりに、カナツクがどこからともなく現れて住み始めている。だからカナツクは『精霊の御使い』って呼ばれてるよ。精霊様に遣わされて森を守ってるんだ、つてね」

「へえ……」

この世界では精霊そのものはお伽噺のような存在だけれど、信仰心はあるらしい。むしろ見えなことからこそ信仰心が高まるのか。無神論者な私だけれど、精霊の存在なら信じたくなる気持ちもわかる気がする。

それにしても……今の話から察するに、私はどうやらこの異世界の中でも結構安全な場所に降り立っていたらしい。正しくは精霊の森ではなく、森からちよつと離れた草原だったけれど。

あんなに焦る必要はなかったなとも思うが、まあ結果オーライだ。これからも慎重に行動しようとする。

「さて、そろそろ沢が見えてくる頃だ。休憩まであとひと踏ん張りだよ」

「はい、頑張りますよう」

マチルダさんの声に頷くと、私は口の代わりに足を動かすことに専念して、歩を速めた。

沢に着くと、腰を下ろせるぐらいの太い木の根を見つけたので、そこでしばらく休むことにした。比較的きれいな草の上に荷籠を下ろし、数時間ぶりに自由になった身体を青空に向かって伸ばす。

深呼吸すると、澄んだ空気が肺に心地いい。

「やっぱり、結構肩と膝にくるなあ……」

肩が凝っていたのか、回すとぼきぼきと音が鳴った。普段運動らしい運動をしていないから、明日はひどい筋肉痛になりそうだ。

マチルダさんは今、ちよつと離れた繁みに行っている。

小さな声で花を摘みに行つてくると言っていたから、多分……そういうことなのだろう。この世界でも同じ表現をするのだなあと、ちよつと面白かった。

彼女が戻つて来るまで特にすることもないので、荷物の見張りをしつつ、木の根に座つてのんびり待つことにした。

この森は、町と村とを繋ぐルートになつているので、歩いている道中少ないながらも他の旅人たちとすれ違った。だが現在いる沢は、そのルートからやや外れた場所にあるため、ひっそりとしている。

周りを見れば、緑の苔むした大地が広がり、細い川が流れていた。かすかなせせらぎの音だけが響く。

「あ、そういえば鞆」

今さらながらに思い出して、横に置いたリクルートバッグの中を漁る。

黒革のバッグの中からは、携帯、ハンカチ、ボールペン、手帳……などなど、面接時に持つて行つた物が出てきた。

きつと無理だろうなと半ば諦めつつも、蜘蛛の糸ほど細い一筋の期待を胸に携帯を見たが、予想通り圏外だった。無論、着信履歴もなにもない。

まだ電池は残っていたけれど、そつと電源をオフにした。もしかしたらいつか役立つときが来るかもしれないが、今はそのときではない気がしたから。

「あとなにかに使えるそうなのは……うーん、手帳ぐらいかな」

ビニールコーティングされた藍色の手帳をバラバラと捲ると、自分の雑な走り書きが予定表の小さなマス目を埋めていた。綺麗な字で書いてあるのは最初の数日だけだ。

苦笑しながら自分の悪筆を眺めているうちに、ふと思に至る。そういえば、この世界の文字はどうなっているんだろう、と。

言葉は、どういふしくみか不明だけれど通じている。でも文字は……読めるのだろうか。文字らしい文字を未だ目にしていないのでわからない。

モンペールの町中の様子を思い返してみたが、やはりそれらしいものはなかった。

宿屋にも、マチルダさんと再会した馬屋にも看板はあったが、文字ではなく家や動物などを模した絵が描かれていた。

市場の様子を思い返してみても目に見える所に値段表は置いていなかったから、会話で値段のやりとりをしていたのだと思う。

もしかすると、この世界の識字率はあまり高くないのかもしれない。

これから行く村に文字が書いてあるなにかがあればいいんだけど……。少し気をつけて見てみることにしよう。

そう心に決めて、荷物を鞆の中にしまう。大方片付いた頃、後ろから繁みが揺れる音と共に足音が聞こえてきた。

「お帰りなさ……あれ？」

マチルダさんが戻ってきたのかと思つて振り向くと、こちらに歩いて来たのは彼女だけではなかった。黒い山高帽やまかぼうを被つた男性の姿が、マチルダさんの後ろからひよいと覗く。

「ただいま。待たせちまつてごめんよ、ソーマ先生」

「いえ、私も荷物を整理してましたから」
片手を上げて詫わびるマチルダさんに小さく微笑んで首を振る。そして後ろの男性に視線を投げかけた。

「ええと……そちらの方は？」

「ああ、この人はねえ」

マチルダさんが紹介するより先に、ふくふくとした顔をした男性が人好きのする笑みを浮かべて帽子を取つて掲げた。

「やあどうも、若先生。あつしはニコラスと申します」

帽子の下からちらりと見えた頭は、中心だけ薄く禿はげていた。年の頃で言えば五十代くらいだろうか。

黒い上着の下に赤と黄の切り替えが入つた派手なベストを着ているが、横幅があるため釦ぼたんが弾け飛びそうになっている。上着と同じ黒のズボンもかなり窮屈そうだ。

そして背中には、恰幅かつぶくの良い身体が隠れそうなほど大きいリュック。リュックからは、地図のような古びた紙筒が突き出ていたり風車かざぐるまが見えていたりと、統一感のないものが顔を覗のぞかせている。一体なにをしている人なのだろう、職業が読めない。

マチルダさんが快活な声で、すぐに私の疑問を解いてくれた。

「ニコラスさんは、あちこちの町や村を回つて行商をしてるそうだね。今日もあたしらとは反対方向の道から歩いてきたんだそうだよ」

「へえ。それでこの辺りでちよつくら休もうと思つたら、こちらのおかみさんにここいらにゆつくり休める場所があると教えて頂いて。そんなわけでこちらにお邪魔した次第なんですさあ」

「なるほど、行商の方でしたか……。私はソーマと申します。大きな荷物をお持ちでさぞやお疲れでしょう。よろしければ、どうぞこちらに」

彼の荷物の半分以下だった私でさえ、ややダウン気味なのだから、彼の疲労の度合いは想像に難くない。木の根の端に寄つて座るように勧めると、ニコラスさんはリュックを下ろしほうつと息を吐いて隣に収まった。

「いや、ありがてえ。ここにこんな良い場所があったとは全く知りませんで。沢の水も良い塩梅あんばいに流れているから、野宿の炊たき出しにも利用できそうですね」

「そうですね。わかりにくい場所ですが、きつとそのように利用されている方も多いことでしょう。なかなか道中、綺麗な水を探すのは大変ですから……」

水の大切さは、今朝顔を洗わせてもらったときにも感じたことだったので頷うなずく。この世界では水道は整備されていないらしく、限りある井戸水を汲み上げて使うのが一般的なようだった。綺麗な川は、重要な資源なのだ。

「水筒か水袋でも持つてるようなら、ニコラスさんも汲くんでいくといいよ。このままで飲み水にな

るくらい綺麗な水だからね」

「うーむ、水筒ですかい。こいつあ商売道具なんですけど……せつかくだ、使っちゃいますかねえ」
マチルダさんの勧めに、冗談なのか本気なのかニコラスさんが笑って応える。その後半の言葉に興味を惹かれて尋ねてみた。

「ニコラスさんは、水筒の他にはどのような商品を扱っていらっしやるのですか？」
行商人といっても、なにを売っているのか想像がつかない。さっき見た限りでは地図や風車などが荷物の中にあつたが、生活用品よりも玩具や嗜好品を多く売っているのだろうか。

「ああ、それはあたしもちよっと気になってたところさ。良かったら広げて見せてくれないかい。なにかいいものがあれば買わせてもらおうよ」

私とマチルダさんに興味津々といった眼差しで見つめられ、ニコラスさんが満更でもなさそうにぼりぼりと頭を掻く。

「おや、お二人さんともあつしの商売道具に興味をお持ちですかい。ならせつかくだ、ちよいとばかり広げてみましようかね」

そして草の上に布を敷き、急遽ニコラスさんの行商タイムが始まった。

6 掘り出し物は行商で見つけましょう

ニコラスさんのリュックからは、こんなに入っていたのかと驚くほど、たくさんものが出てきた。

「わあ……！」

まず目に入ったのは、鮮やかな朱色や萌黄色をした民族調の反物や古着。その横には、妙齡の女性が好みそうな花の意匠の髪飾りや、青や薄桃色の綺麗な石の嵌まった首飾りが並んでいる。

女性向けのものばかりではない。年季の入った飴色のパイプや、古びた羊皮紙に描かれた文字のない絵だけの地図があるかと思えば、積み木や布人形など幼い子供が喜びそうな玩具もある。

これはなんだろう……。小さな額縁に入った、手のひらサイズの肖像画のようなものを見つけた。描いてあるのは、勇ましい雰囲気の男性の立ち姿だ。

「おや若先生、お目が高い。そりゃあノルヴェスの英雄レオンの姿絵さ。最近じゃあ、騎士に憧れる坊主たちだけじゃなく年頃のお嬢さんたちも欲しがかる代物でさあ」

「ノルヴェスの英雄、ですか」

ノルヴェスというのは、地名だろうか。初めて聞く単語だ。

そして子供と若い女性に特に人気の騎士らしいが、言われて見ると確かにそんな雰囲気だ。金色

の髪に青い瞳のその青年は勇ましくも美しく、どこかの国の王子と見紛うほどの高貴な雰囲気を出している。

中世ヨーロッパの王族の肖像画然り、こういったものは美化されて描かれることが多いと聞くから実際はどうかかわからないけれど、これを見た少年たちや若いお嬢さんたちはさぞや熱を上げるだろう。

ちなみにファンタジー小説好きな私は、騎士という単語だけでちよつときめいた。かなり安上がりだ。

「あの……お恥ずかしながら私は遠い国の生まれで、この英雄の方についても実はよく知らないのです。申し訳ありませんが、少し教えて頂いてもよろしいでしょうか？」

このまま知っている振りをして流すこともできたが、ここは聞いておいた方が良さだろうと判断する。

人々の興味を集める存在ならこれからも話題に上ることはあるだろうし、それに私自身、騎士というものに興味を惹かれたのだ。

「おや、そうだったんですかい！ そいつはあつしの方こそ失礼しました。この英雄レオンがいる騎士団というのがですね……」

ニコラスさんが教えてくれた話は、まとめると次のような感じだった。

この国には、中央を守る近衛騎士団のほか、東西南北に四つの騎士団がある。

東のノルヴェス騎士団。

西のメレル騎士団。

南のイスカ騎士団。

北のガリマー騎士団。

英雄レオンは、その中でも精鋭揃いと言われている東のノルヴェス騎士団に属する若き騎士らしい。

隣国が北東の領地に攻め入ってきた先の戦で比類ない活躍を見せ、それ以来国中の男から尊敬の眼差しを、女子供からは憧れの眼差しを向けられているという。聞けば、年齢は二十代前半なのだとか。私と同じ年か、いくつか上ぐらいだ。

「まだ若いのに……すごい方なのですね」

感心して小さく息を吐くと、ニコラスさんが強く頷いた。

「本当に大したもんでさあ。他にも、最近とみに名をあげた騎士にやあ『剛腕ウォーレン』や『狩人ジャック』、『死神セス』なんかもあるが、やっぱり一番話題に上るのは『金獅子レオン』でしような」

他にも通り名持ちがいるらしい。こういうところが、やっぱり異世界だなあと感じる。通り名のはつきりした由来はわからないけれど、ほのかに人物像が浮かび、聞いているだけで楽しい。しかし騎士なのに狩人……これだけはちよつと謎だ。

そういえばマチルダさんの声が聞こえないなあと思えば横を見遣ると、古着を熱心に眺めていた。

「マチルダさん、なにか良いものでもありましたか？」